常照

第８２９号

本願寺小樽別院

二月の常例布教（ご法話）のご案内

○前　期　二月七日（火）～十一日（土）
北海道教区　札幌組　覺英寺
講師　黒田顕城師

○後　期　二月十三日（月）～十六日（木）
北海道教区　後志組　照覚寺
講師　佐々木法雨師

○場　所　小樽別院内

○時　間　午後二時（法要終了後）～午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。
どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院ください。
席の間隔を保ち、換気実施の上、お待ちしております。

いのちの長さ

皆さんは新聞のお悔やみ欄に若い方の名前が掲載された時「かわいそうに」と思ったことはないでしょうか。逆に百歳の方が掲載されていたら「すごい、大往生だ」と呟いたことはないでしょうか。

私も初めて自分より年下の、四十代の方のご葬儀を勤めさせていただいた時、やはり「どうしてこんな若い人が、早く亡くなってしまうなんて」という思いがまず浮かんできました。また逆にご高齢で亡くなられた方のご葬儀では「命を全うされたなぁ」と勝手に思ったりもします。

しかしこの前、ちょうど百歳で亡くなられた方のご葬儀をお勤めいたしました。その方は大変お元気だった方で、亡くなる数日前には月忌参りで普通にお会いしておりましたし、前日には庭作業を一人でされていたそうです。ただその日の夜に体調が急変し、そのまま息を引き取られたということでした。その時にご家族の方がおっしゃったのが「百歳という年ではあったけれど、あれだけ元気だったのに、こんなに早く逝ってしまうとは思っていなかった」ということでした。

私が四十代の方のご葬儀の時に感じたのと同じことを、その百歳の方のご家族も感じておられたのです。そのときに私自身が思い知らされたことは、自分は知らず知らずのうちに、いのちというものを長さで計っていたんだということでした。そしてそのことが実に不確かだったか、ということも同時に思い知らされた気がしました。

私たちは実はいのちとか、人生というものを長さで計ろうとする傾向があるのではないでしょうか。でも、そういう見方でいのちや人生を見ていくと、見過ごしてしまうものがあるんだと思います。

数年前に、車のラジオから流れてきたＣＭに耳を奪われました。それはある車のＣＭだったのですが、男性のナレーションで、「いつまでもその車に乗れるわけじゃない／いつまでも乗れる、いつまでも乗せられると思っていても／その車がどんなに大好きでも／あっという間に気がついたら思い出の車になっている／そしてどんなに乗りたくても／その車にはもう二度と乗れることはないんだ／だから／乗れるうちに思いっきり乗ろう／乗せてあげよう…」と続きました。私は何の車のＣＭなのかなと思って次の言葉を待ちました。そうしたら同じ男性のナレーションで最後に一言「親父の肩車！」と言い放って終わるというＣＭでした。思わずなるほどと吹き出してしまいましたが、私たちのあり方にも通じる切なさみたいなものを感じました。ちょうどその頃私も子供が小さく、よく肩車やおんぶをせがまれることがありました。でもそのたびに、今日は疲れたから、また今度してあげるからなどと言って、はぐらかしていました。今その子供たちも大きくなって、肩車をせがまれることもなくなり、してあげることも不可能になりました。それどころか長男なんかはあまり口をきいてもくれなくなりました。「また今度」があると思っていたら、その「今度」はあっという間に過ぎ去るのでしょう。

そうして人と人がふれ合い、交わり合い、本当の意味で自分自身が豊かになっていく瞬間を、私たちは見過ごしてしまうのではないでしょうか。いのちや人生を長さで見たときに、私たちは「今、ここ」という時間のかけがえのなさを見落としてしまうのです。

大切な方の死というのは、私たちのそういう見方が、幻想なんだということ教えてくれているのだと思います。ご葬儀やご法事はそのことを知らされるためのご縁なのでしょう。人生に大切なことは、長さではなく、深さです。長さを求めるのではなく、深さを求める歩み。それは大切な方の死から私たちが学び、いのちの事実にしっかりと目を開いていくことで賜っていくのだと思います。

人生は長さ
だけではない
幅もあれば
深さもある

金子大栄